

「秘湯は人なり！」

(特別寄稿) 大平温泉 滝見屋 若女将 安部 里美 氏



大平温泉滝見屋の若女将、安部里美さん「温泉米沢八湯会」の設立時から事務局を担っておられます

歩いてたどり着く最上川源流の隠れ宿  
大平温泉 滝見屋

「私は青年のひとりに「大平温泉とはどんなところだね」とたずねた。「んだなあ、ま、まずお日様が「あいさつする程度だなあ」これはまさに言い得て妙だった。この訳は、アルファベットのV字をもっと幅せまくしたように深くえぐられていた。そして、このV字のいちばん底に大平温泉の宿はたった一軒ボツンとあった。」

山形大学卒業後、小説家として児童文学作家として活躍した彼が描いたユニークな大平の風景。この本が書かれたのは50余年も前のことですが、宿周辺の様相は今も全く変わっていません。吾妻山中の仙境は米沢盆地を流れる最上川源流近く松川本流に沿う柳沢溪谷に位置する海拔1,050mにあり、丈余りの石垣の上に建つ宿は、小さな山塞のよう。現在も最後は歩いてようやくたどり着く秘湯中の秘湯です。

変わりがなくてもなかなか変えられなかった、というのが先祖を含め親たちの本音でしょうが、時間や情報の流れがどんどん加速する時代にあつて、変わらざるにあり続けるということが、お客様にとって意外と説得力をもつ時代になりました。創業から100余年。

道なし、電気なし、重機も入れないこの環境で、こんこんと湧き出る温泉と自然に魅せられて、少しずつずかずか歩いてきた私たちの先祖と家族の歴史は手作りしと自然との闘いと連続に他なりません。

移ろいゆく自然、水、温泉。私達はある意味、最大の自然エネルギーを最大限に活用していると言えます。しかしその前で私達は本当に無力です。常に計算できないファジーさが伴い、もしかしたら企業としては失格かもしれません。こうした自然エネルギーが日々私達の生活すべての中心にあり、策がとれない、策なしという部

分が少なくなく、旅人を迎える立場の私たち自身が峠から峠に移る旅を続けているようだからです。無策の策がいいとは言いませんが、3・11大震災や年々厳しくなる気象条件のはからいを超えて、自然に生かされ、ここに今滝見屋があるという事実。それは106年目を預かる私たちの想いをとうに超えています。

全国から来て下さるゲストや守り手である職人さんやスタッフの繋いでくれるバトンに対し、今私たちが自然と共に生きること、その生き様を見て頂くことが、日本の原風景の美しさや生命力を知って頂くことにはなるのではないかと今改めて思うのです。

「秘湯」という言葉には、現在の生活では失われがちな自然への憧憬、どこかで「自然に帰りたい」「日本の懐かしい原風景」といった忙しき現代人の郷愁の心を呼び覚ますような響きを感じるのには私だけでしょうか。この言葉は当時(株)朝日旅行会の創業者だった岩木一二三先生(平成13年没)が生み出しました。

先生は、業界リーダーの中でも傑出した先見性で、高度成長期に勢いづく観光業界でさえ見放す程の秘境で小さな湯宿を営む者たちに、秘境宿に生きる意義や限らない希望や人生のロマンを問い続けました。



V字のいちばん底、最上川源流の川辺に大平温泉滝見屋の全景が現れる

そんな、小さな宿たちが集まり「日本秘湯を守る会」を作ったのが、昭和50年。当時わずか30数件で始まったこの会は、現在会員数が全国約180軒に上り、昨年40周年を迎えています。当館は第3期会員として祖父の時代に入会し現在に至り、私は、特にこの会から隣山の宿を紹介しあうといった共生の理念を学びました。

つい最近まで、迫りくる数々の自然との格闘や社会情勢をこの仲間たちと研修会などを通して親戚のように分かちあつてきました。分かちあつてきたつもりでもありました。しかしその結びつきを超えた地震、津波、噴火、集中豪雨、自然災害、それに伴う原発事故など、昨今の自然の試練は、今までの生き方や社会をも根本から問い直しをさせられているかのようです。

旅は、形はなくてもその人の心に「想い」となつて残るもの、と私はこの会から教えられています。そして、温泉をもたらし続けてくれる自然も「物」ではありません。物であれば再生可能ですが、一度破壊されてしまつたら、自然は元に戻すことができないからです。私は自然豊かな秘湯を守ることは大自然や山岳文化だけでなく、地域文化を残し育むことだと、思っています。

大震災以降、国の施策が自然エネルギーの導入拡大に向かっているのはご存知の通りです。大規模な地熱発電が可能なら50度以上の熱水地域は、その約82%が秘湯の点在する「国立公園特別保護地区・特別地域内」にあることが分かっており、「自然公園法」「温泉法」等に関して開発緩和できる改定への準備が進められています。

地域に地熱発電所を既に抱えている温泉地では大深度の掘削や試掘によって豊富だった自然湧出泉が枯水期に枯渇する兆候が顕著に現れており、吾妻地域をはじめ、今後調査地域となるのが決定している全国にある仲間の秘湯宿の自然や温泉などへの影響がとて心配です。(3ページへ続く)



大自然のパノラマに囲まれた露天風呂(男性)

『私とMOT』 シリーズ編

MOT九期生 池田アレックス潤平 氏



沢平山から眺める池田アレックス潤平氏  
留学先として、山形大学の経営学専攻

まだ卒業もしておらず、人生経験も少ない私にこの記事を書かせていただくことは非常に恐縮ですがこの2年弱、MOTの留学生としての経験や思ったことなどを皆様にお伝えできればと思います。筆を取らせていただきました。テーマとかけ離れている部分もあるかと思いますが、最後まで読んでいただければありがたいと存じます。

自己紹介:

私の本名は池田アレックス潤平です。既にご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、私は南米の丁度真ん中あたりにあるボリビア多民族国サンタクルスのサンファン日本人移住地で生まれ育ちました。ボリビア日本人移民に関する歴史を語り始めるのが長くなりそうですので他の機会にご説明させていただきますますが、戦後祖父母がボリビアへ移住し、日本人移住地を形成したことから始まりました。

父母もボリビアで生まれ育ったことから、私は日系3世になります。ちなみに日本人以外の血は混ざっておりません。中学まで日本語を第2外国語として勉強し、家庭内でもほとんど日本語を使っていたことから、会話等での問題はほとんどありません。むしろ日本語が母国語に近いかと思えます。

中学まで日本人移住地の学校に通い、高校・大学は移住地から約140キロ離れたサンタクルス市の学校に入学しました。高校・大学ではスペイン語のみの授業でしたが、ボリビアで生まれ育ったものの、スペイン語の講義内容の理解には非常に苦戦しました。大学では産業工学を専攻し卒業後、2013年から山形大学大学院MOT専攻の留学生として在学しています。

留学のきっかけ:

私は日系人として日本の教育に対して非常に強い興味・関心を持っていました。高校生の時、国際協力機構(JICA)による日系人に対しての奨学金制度の存在を知り、この制度を通じて日本の大学院への進学を計画しました。大学で産業工学を専攻する中で、講義の一部で経営学をほんの少し学びました。



大学でボリビア多民族国を紹介した際のボリビア人留学生の集合写真  
(前列中央が筆者)

が、そのときにこの分野にひかれ、大学院では産業工学で得た知識を活かしつつ経営学を学ぶことのできる技術経営学を学びたいと思ったことがきっかけでした。早速JICAの奨学金制度に応募し、技術経営学を学ぶべく大学院を探していたところ、ボリビアで知り合った日本人の交換留学生がたまたま山形大学の学生であり、大学の存在を知りました。MOTは他の大学でも既に探しており、いくつかの候補は上がっていたものの、じっくり悩んでいたところ、山形大学のものづくり技術経営学が目にとまり、迷わず第1希望として選択しました。それから、様々な縁や助けもあり無事、大学院へ入学することができ現在へと至っております。

在学中の思い出:  
この留学期間中は縁の大切さを非常に強く実感した期間でした。大学入学前から様々な出会いがあり、これらの出会いが私自身の世界観や視野を大きく変えました。偶然にも私が入学した年度からリチウム開発関係でボリビア人留学生が山形大学に派遣されることになりましたが、日本に来てからもボリビア人とともに同じ研究室で勉学に励むことになるとは、想像もしておりませんでした。

ボリビアに住んでいた頃以上に、ボリビア人と深く関わったような気がします。この出会いのおかげで、ボリビアの魅力や習慣の違うなどをより敏感に感じ取ることができました。また大学でも彼らのおかげで様々な機会を与えていただき、通訳や翻訳をまかされる等、他の留学生と比べて多くの経験やチャンスを与えていただきました。

他にも、留学生として大学院に入学できたことで、ボリビアにいた頃にはなかなか関わることのなかったイスラム教の学生やアジア人学生など、様々な国の学生とも関わる機会を与えていただき、私の中の世界が少しずつ繋がっていくように思えました。現在は英語を強化するうえで、外国人留学生と積極的にコミュニケーションをとることを心がけています。

MOTの講義に関しては、留学生や社会人の方とともに講義を受けることができたのが、非常に貴重な体験となりました。授業をより現実的かつ国際的な視点から考えることができ、就労経験のない自分にとって学ぶことだらけでした。幅広い年代の方々とのコネクションができ、このコネクションを今後の自分自身の成長に繋げていきたいと思っています。

今後の目標:  
私は大学入学前から、将来、生まれ育った故郷で、食品加工の分野で事業を展開してみたいという夢がありました。幼い頃から農業や果樹園を営んでいる父の影響が大きかったものと思います。



↑ だるまの絵付けを体験した後にとった写真

まだ自分にどのような将来が待っているかは分かりませんが、ここでの経験を活かして、図太く生きていきたいと思っています。

今後ともどうぞよろしくお願いたします。

## 平成26年度学位記授与式が行われました！



平成26年度の学位記授与式が3月21日(土)、米沢市営体育館にて挙行されました。小山清人学長より、「山形大学で学んだことを誇りに思い、人間力を高め、これからの人生をしっかりと歩んで欲しい」との告辞がありました。

ものづくり技術経営学専攻(MOT)からは、「とうほくMITRAIコース」(留学生コース)の3名、「価値創成コース」の5名の方々が栄えある学位記の授与を受けました。

「卒業を迎えられた皆さんは、写真前列の右から、チャン・ダイ・チュンさん、武藤隼斗さん、楊軼群さん、佐藤駿介さん、後列の右から、安部綾人さん、将志香さん、宮越実さん、遊佐正行さんです。

に「こやかな皆さんの笑顔が素晴らしいです。機会がありましたら、是非卒業後も母校に顔を出して下さい。」

「こつぞ2年間の学びと体験を活かし実社会で頑張ってください。皆さんの、今後の活躍を祈念申し上げます！」



Y-MOTネットワークの仲間、山口玲子さんが昨年の夏にお母さんになりました。

中国の上海ご出身の山口さんは英語、中国語、日本語が堪能で、インバウンドに向けた山形県の観光について研究をされています。

大都市が中心の観光は、今後、美しく安心でおいしいもののある田舎に変化し、山形のチャンスを感じているとお話し下さいました。

多くの海外のお客様を歓迎できるよう、山口さんの今後の益々のご活躍を期待致しております。

《インタビュー：黒田 三佳編集委員》



「コーヒープレイクで今日は！」

### 「機関誌購読のお願い」

Y-MOTネットワークでは機関誌を、3~4回/年発行しております。送料として郵便切手(82円)をお送り頂ければ、機関誌を発行毎にお手元にお送りいたします。

送付頂いた切手の枚数に応じた期間、発行都度機関誌をお送りします。是非お申し込み下さい！

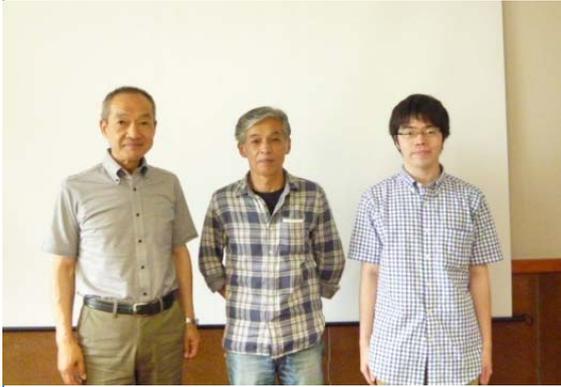
(申し込み先：〒992-8510 米沢市城南4-3-16 MOT事務局内 OB会代表 渡邊 毅 宛)



約15分ほど下ってくると吊り橋があり、それを渡ると目の前に滝見屋がこつ然と姿を見せる  
新緑の中、紅葉の中、いつも変わらぬ姿で我々を待っててくれます

(1ページより続く)  
地域を繋げたい！温泉米沢八湯会の想い  
そういった意味では、「温泉米沢八湯会」の活動も同じです。もともと米沢には古くから温泉が湧く8つの温泉地24軒がありましたが、営業スタイルも規模も異なるため、同時に8つの温泉地域が交流するという機会は意外にもありませんでした。  
「温泉米沢八湯会」は、3・11東日本大震災をきっかけに発足しました。上記8つの温泉地24軒が、競合しない温泉地づくりを目指し、地域の湯守りとして温泉資源を守っていきただけでなく、地域の横糸として米沢を元気にしていきたいという目的で諸先輩達が立ち上げに尽力して下さいました。  
私は設立当初から、その事務局をお預かりしております。震災一年目は、義援金及び米沢域内買物券を付帯した共同プラン、私たちが始める 絆の米沢八湯プランを発売し、428名の宿泊を達成し、お客様より150万円の義援金をお預かりすることが出来ました。また第二弾は、当時風評被害に遭っていた米沢牛を応援するため域内で米沢牛を消費して頂く共同プランを作成。この2プラン合計で経済効果4,260万円を生むことができ、その後も行政のバックアップを受けながら、地域の皆様との繋がりが連携できる企画を模索してきました。  
発足から5年目となる今年は、私たちが全国から来るお客様と米沢の生産者を繋ぐプラットフォームになるべく、「米沢八湯 泊ると届く、おすわけ小包プラン」を企画し、地域の点と点を結んでいく活動を深め、発信していきます。  
「秘湯は人なり」と言い切れるよう、修行の毎日です。皆様のご指導どうぞよろしくお願い致します。

## 「平成27年4月入学の皆さんをご紹介します」



ものづくり技術経営学専攻の平成27年4月入学生は、「とうほくMITRAIコース」に6名、「価値創成コース」に5名の方が入学されました。

「価値創成コース」へ入学の、右から武田浩史さん、渡邊耕二さん、國分一典さんです。尚、木村正子さん、金俊次さんは都合により欠席されました。

「とうほくMITRAIコース」へ入学の、右からゲン・スアン・クインさん、蕁巧琳さん、劉金金さん、王耀駿さん、アハド・パルヴェスさん、パリタット・ムンチャンです。

## もっとみらいコンソーシアム総会・シンポジウム開催



平成27年5月13日(水)山形大学工学部百周年記念会館にて、第6回「もっとみらい」コンソーシアム総会・シンポジウムが開催されました。

シンポジウムでは、兒玉専攻長及び長谷川健もっとみらいコンソーシアム会長からの開会挨拶に続き、理工学研究科の野田准教授から、とうほくMITRAIコースの教育内容についての説明と国際交流センターの仁科准教授から日本人学生のグローバル化教育と地域貢献型の留学生教育と題する講演をいただきました。明治大学・国際教育事務長の安藤章二氏から「グローバル適用型の大学形成と地域産業・社会の活性化」と題して基調講演を頂きました。

## ラジオ深夜便 誕生日の花と短歌 365日

### 短歌とエッセー

鳥海昭子(編集:発行NHKサービスセンター)

最近、うとうととしていると、いつの間にか眠り込んでいる自分に気が付きます。缶ビールをちょっと飲んだくらいですので、昔に比べれば弱くなりました。

そう言えば我庭にも、幾つかの「野鳥の贈り物」があります。名前も知らない野草が、あちこちで小さな花を咲かせてます。アスパラの茎が庭隅の3ヶ所から出現すると、思わず微笑みます。(編集委員A)

6月27日(土)「本誌の発行日」の花は、「**ホタルブクロ**」キキョウ科です。

花言葉：**正義**

短歌：ホタルブクロの 俯く花に  
かくしおくほどの かすかな恥ずかしさあり



### 《編集後記》

ようやく梅雨に入りましたが、この間の暑さや各地の集中豪雨等、目まぐるしい気候の変化はいよいよ温暖化の影響が顕著に出てきていることを痛感致します。今回は、「日本にもこんな不便なところが残ってます！」と謳いながら100余年に渡り秘湯を守り続ける大平温泉滝見屋旅館の若女将安部里美さんからご寄稿を頂きました。最上川の源流、大自然のパノラマは不変でしたが、「米沢八湯会」を立ち上げたりビジネスの新しいプランには、秘湯を守る心意気を強く感じました。是非皆様も、不便な秘湯に一度お出掛け下さい。また、「私とMOT」にはボリビアからの留学生、池田アレックス潤平さんにご登場をいただきました。誰れにも負けない日本人らしさをもっている彼は、間違いなく国際人として活躍されることと期待しております。1964年開業の新幹線、51年間自己責任による死亡事故はゼロとその運行管理を誇っていたが、予測出来ない人間の気まぐれな犯罪行為により、神話は脆くも崩れてしまったのか？10秒以内を目標に、15秒以上の遅れを遅延として認識していた高度な管理は、予測していないソフト面の出現で苦境に？(編集員一同)

### 《MOT事務局便り》

MOT事務局より、大学の動きやMOT専攻に関わる情報をお知らせ致します。

- 平成27年9月修了予定者修士学位論文予備審査会
- 平成27年7月18日(土)10時00分～15時00分(於・A講義室セミナーホール東)
- 平成26年10月入学生初年度研究経過報告会
- 平成27年8月22日(土)9時00分～10時50分(於・中示範A)
- 平成27年9月修了予定者修士学位論文公聴会11時00分～16時00分(同日・同場所にて)

MOT事務局